

第56回日本臨床眼科学会

演題 装用型自動合焦拡大鏡のロービジョン者への使用経験

ショートタイトル AF眼鏡の使用経験

氏名（発表者、共同演者）：○三瀬一之、土屋利紀、大浦福市、吉村篤治

所属：宮崎中央眼科病院 宮崎市清水3-6-21

目的：現在市販されている拡大読書器や単眼弱視鏡はその用途や使用場所が限られるため、視覚障害者の日常活動全般に対する汎用性は低い。そこで、小型軽量で自動合焦機能により遠見から近見まで両手を開放することのできる装用型自動合焦拡大鏡（以下、本装置と略す）の開発を行った。この試作モデルをロービジョン者に装用してもらい有用性を検討したのでその結果を報告する。本装置開発には（株）日東光学、（株）増永眼鏡の協力を得た。

対象及び方法：対象は、平成13年6月から11月の間に当院を受診した網膜色素変性症、糖尿病網膜症等のロービジョン患者40名48眼（男性13名・女性27名）。年齢は12歳～79歳（平均年齢63歳）、矯正視力は0.01～0.1であった。標準視力表で遠見（5m）及び近見（30cm）の視力改善効果を比較し、装用感についても調べた。

結果：遠見視力の平均値は0.05であったが、本装置を用いると平均で0.4の視標が見えるようになり、7.5段階の視力改善効果がみられた。近見では、視力0.05から0.2となり、6段階の改善がみられた。実用視力としては遠見視力0.05以上であれば本装置によりテレビを見ることができ、近見視力が0.07以上あれば新聞等の文字を確認することができた。

結論：本装置は、遠見、近見ともに従来の機器よりも利便性が高く、ロービジョン者の視機能改善に貢献できる実用的な補装具と思われた。